山梨新報「直言」原稿

「盛者必衰」産業編

山梨県立大学長　伊藤　洋

二〇〇九年八月七日

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もついには滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」これは、『平家物語』の冒頭である。現代の娑婆の姿も、落剥する平家同様に「盛者必衰（じょうしゃひっすい）」の「火宅」のようである。政治、経済、社会、どれを取っても、すでに極大点を通過し終え、何もかもが縮小化するようにしか見えない。中でも政治の衰弱についてはいま目を覆うばかりであるが、公示間近の総選挙にいささかの影響があってもいけないので「盛者必衰　政治編」として次回に譲り、今日は「火宅に生きる産業」について話そうと思う。

アメリカの評論家で未来学者アルビン・トフラーが『第三の波』という衝撃的な本を発表したのは１９８０年。３０年後の今になって、彼が語ったことがようやく成就したのではないかと、筆者は思っている。それを感覚的にも明確にしたのが昨秋のリーマンショックだったのではないだろうか。

トフラーはこの書物の中で、人類は今までに二つの波をくぐってきた。一つは狩猟採集型社会から脱した「農業革命以後の社会」であり、第二の波は「産業革命によってもたらされた工業化社会」であり、そして今「第三の波」という情報化に代表されるような「脱工業化社会」がやってきた、と言ったのである。

たしかに先進諸国においては、トフラーの言うように現象面では８０年代に脱工業化が始まったとは言うものの、政治・行政システムのアルゴリズムまでがそうであったかというと疑わしい。彼がこの書物の中で説明していたように、「第二の波」の工業化社会では、全てが「規格化」され、「専門分化」が浸透して人々が分断され、世界中が一つの時計で動く「同時化」がグローバリズムというシステムの中で深化し、金融や物流の市場が大資本やアメリカの

ような基軸通貨国家に集中し、かつ「極大化」し、こういう情報を握っている官僚による支配が極端な「中央集権化」を招いていった、のである。

これら工業化社会の陥穽は、現在では私たちの面前にさらけ出されていて誰にも肌身に感じられるようにさえなっている。しかし、それとてもトフラーが書いた８０年ではなく、直近のリーマンショック以降の話ではないだろうか。

全国知事会で話題になった「地方分権化」問題などは、「第二の波」社会の「中央集権」に対する強烈な反発であったし、巷に横行する「官僚批判」は「極大化」や「規格化」への痛烈な批判である。大病院に行けば、患者の臓器は微に入り細を穿って診てくれるが、ついに病める一個の人間としては診てもらえなかった話などが枚挙に暇無く語られる。「専門化」の端的な弊害だ。

こんなことを考えていた矢先、ヴァン・フォーレ（ＶＦ）山梨スポーツクラブ代表取締役社長の海野一幸さんら鼎談の機会があった。その中で、海野さんは同時不況以降のＪリーグの窮状に触れて、大企業を冠として活躍してきた有名チームの構造は「サーカスの円形テント」だと話された。サーカスのテントという

のは、真ん中に大黒柱が一本、周辺に小柱が数本で成り立っている。小柱が何本あろうとも大黒柱がなければ、テントは張れない。冠企業が盛んなときには、大黒柱も強靭で、テントも高くぴんと張っていたのだが、一度これがぐらつくとテントをたたむ以外には取り替えようが無い。

これに対してＶＦ甲府は、地域に密着した沢山の企業や自治体、ボランティア団体、個人や家族によって支えられているフィンにはばかりで構成されている。そういう「小骨」強みが不況に強いＶＦ甲府を創り出しているというのである。これはシステム工学で言う「ロバストネス性」というもので、強いシステムの典型的なタイプである。

「第二の波」社会の代表格で２０世紀後半を牽引してきた米国のビッグスリーがよもやの破綻状態となっている。「極大化」のシンボルだった自動車はその定義を急激に変えていくことだろう。白物家電等の耐久消費財、半導体メモリーなども同様、作れば売れる「極大化」商品ではなくなることだろう。

極大化した「盛者」産業が「必衰」する時代。大黒柱ではなく小柱となる多数の新規な地域産業を着実に創り出す時代がやって来たのだ。